長崎人、福地桜痴の上京

――苟庵の書簡から――

丹羽みさと

はじめに

明治三十九年一月八日、新聞記者、政治家、戯曲家など多彩な顔を持つ福地桜痴（源一郎）の葬儀[1]が、芝の増上寺本堂にて営まれた。そこには「社会の上中下流を籠めたる一小天地[2]」が見られたという。

会葬者には伊藤博文や井上馨、岩崎久弥、大槻如電、菊池大麓など、政財界や学界の実力者に加え、竹柴其水や市川高麗蔵といった演劇界の著名人、そして新聞関係者や新橋待合五業組合の人々などの姿もあった。また、もし九代目市川団十郎や仮名垣魯文、山々亭有人、三遊亭円朝などが存命であったならば、彼らの姿も見ることができただろう。桜痴はその語学力や、渡航経験を生かして、彼らの活動に新風を吹き込むべく、助力を惜しまなかったためである[3]。

生涯を通して幅広い人脈を培ってきた桜痴であるが、社交的な性格は、父親の福地苟庵（載世　別号石橋、浄慶、魯庵）譲りであった。長崎の町医として生計を立てていた苟庵は、「点茶と俳諧[4]」を得意とし、同地で多くの名士と交流を深めていた[5]。桜痴が安政年間に上京する際には、幕府の高官や学者に宛てた紹介状を、数多く持たせている。桜痴は上京後、これらの伝手（つて）を頼り、交際を広げた。通弁官として仕官が叶ったのは、桜痴自身の実力はもちろんであるが、苟庵が通詞や外国奉行などとつながりがあった影響も、看過できない。

文久元年十二月二十二日、桜痴は開市開港延期交渉の通弁方として、欧州へ渡航することとなった。石炭の補給のため二日間、長崎に留まった桜痴は、苟庵と久々に対面を果たし、翌年の正月元旦、欧州へと出航する。これが親子の永訣となり、苟庵は約五ヶ月後の文久二年五月七日、「乃父に代りて有用の人となれ。是れ我志なり」（福地桜痴「石橋先生伝」『東京日日新聞』明治十七年六月三十日）という言葉を家人に託して、その生涯を閉じた。

苟庵については、桜痴の「石橋先生伝」（『東京日日新聞』明治十七年六月二十八・三十日）や「懐往事談」（『国民之友』明治二十五年十一月以降連載）、桜痴の子である福地信世の「長崎と上

海の往事（福地苟庵翁の書簡より）」（『支那』大正十五年三月）などに紹介がある。また先行研究としては、川邊貞蔵『福地桜痴』（三省堂　昭和十七年）や坂本多加雄「福地桜痴と明治維新」（『学習院大学法学部研究年報』昭和五十九年三月）、渡辺展亨「福地桜痴」（『日本近代文学館』平成十年六月～平成十三年五月）、亀田一邦「福地苟庵小伝」（『幕末防長儒医の研究』知泉書館　平成十八年）などで言及されている。

本稿では、これらに加え、桜痴研究の俎上に載ることがほとんど無かった苟庵の書簡を通して、上京後の桜痴の動向と苟庵の影響などを考察したい。

現在、日本近代文学館に所蔵されている苟庵の書簡は、昭和四十三年四月に桜痴の親族から寄託され、一年後に譲渡されたものである。桜痴が上京した安政五年から、欧州へ旅立つ文久元年までの書簡十点が、時系列で巻物に仕立てられている。巻末には信世によって「太府君福地源輔より府君源一郎に与へたる書簡数多之中より十通を択てこの巻となす」と、その成立経緯が記されている。書簡の日付は以下の通りである。

① 安政五年十二月二十四日（安政六年二月三日桜痴披見）
② 安政六年四月二十六日（安政六年六月二十一日桜痴披見）
③ 安政六年七月二十五日
④ 安政六年八月十七日（安政六年九月二十一日桜痴披見）
⑤ 安政六年十一月十七日
⑥ 安政六年十二月二十四日
⑦ 万延元年閏三月七日（万延元年五月八日桜痴披見）
⑧ 文久元年六月十五日
⑨ 文久元年八月二十三日
⑩ 文久元年十月十五日

なお本論中の引用文には、適宜ルビを省略し、句読点、濁点を付与した。

1　桜痴の上京

桜痴は江戸に出てきた時のことを、「桜痴居士自筆小伝」二（『東京朝日新聞』明治三十九年一月七日）において、次のように語っている。

源一郎は長崎士人の気風に合はず。又、長崎に居て、地役人たるを甘んぜず。東遊して青雲を攀（よぢ）るの志ありけるに、矢田堀景蔵（やだぼりけいぞう）、榎本釜次郎の諸君、時に海軍伝習として長崎に来り。源一郎に勧むるに、東行を以てせられたれば、源一郎は安政四年の冬、矢田堀氏に随従して、江戸に来れり。

安政四年の冬に上京したというこの記事は、野崎左文の求めに従い、桜痴が明治十八年に書き送ったものであり、[6]「誤字落字と思はるゝ所のみを正し、其他は一点も筆を加へずして、転載[7]」した略伝である。[8]しかしながら、桜痴が記したもうひとつの年譜「仕途日記」（『還魂紙料』大正七年）には、「五年戊午（中略）十二月　御軍艦頭取矢田堀景蔵に従ひ、咸臨丸御船ニ而、江戸ニ来ル」とあり、一年のずれが生じている。[9]

近年の研究では、安政五年説が主流となっており、[10]おそらく「安政四年」は桜痴の記憶違いであろう。というのも、桜痴が乗船した咸臨丸は、安政四年八月にオランダから長崎に到着し、しばら

く長崎近海で操船訓練を行った後、翌年の十二月に勝麟太郎および矢田堀景蔵を指揮官として、江戸へ向かっているためである。[11]

桜痴が咸臨丸に乗船していたことは、安政五年十二月二十四日、苟庵が書き送った書簡にも記されている。

江戸船発帆便ニ、一筆申進候。咸臨船抜碇後ハ、好天気のミニ而、夜間少々俄雨も有之候とも、船路ハ定而好順と存候。宿本より日々指を屈し、行程を相計り候ニ、最早頃日ハ浦賀江着ニ可相成と存候。直様江都ニ乗入ニ相成候や。又ハ初計の通り、浦賀にても越年にや。いづれ江都着之上ハ、速かに書状肝要ニ奉存候。

天候もよかったので順調に船は進んだだろう、今頃はどの辺りにいるのだろうか、もう浦賀には着いただろうか、年越しはどこで行うのだろう、無事に江戸に着いたら手紙を出しなさい、とあふれんばかりの親心が認められている。また同書簡には、「森山、西などの手伝ひなど然べし。矢田堀様へよろしく致声あるべき事。永持様、御親切ハ忘るべからざる事。とかく身分を考へ、卑下第一也」と、通詞の森山多吉郎や西吉兵衛、咸臨丸の艦長役であった矢田堀景蔵、その矢田堀や勝海舟とともに長崎海軍伝習所で重用され、長崎奉行支配吟味役となっていた永持亨次郎[12]などへの対応について記されている。江戸に到着した桜痴は、彼らとの関係の中で日々を過ごしていく。

桜痴はまず、軍艦操練所の教授方頭取であった矢田堀景蔵の塾に寄宿し、その後、水野筑後守忠徳の食客となった。[13]水野は安永四年四月から約半年間、長崎奉行として赴任しており、[14]この頃、苟庵も長崎奉行所配下の唐人屋舗出入医師に任ぜられていた。[15]苟庵の書簡には何度か水野忠徳、そしてその家老、廣川忠左衛門の厚意に対する謝意が記されており、[16]直接の交流が両者の間にあったことは間違いない。

安政六年春から桜痴は、小石川金剛寺坂上[17]に位置する森山多吉郎家の塾生となり、そこで英語を学び始めた。福沢諭吉と出会ったのはこの森山の塾である。開港間もない横浜に出掛け、オランダ語の通じなさに落胆し、英語の習得を志したという福沢[18]と異なり、桜痴は英語を学び始めた理由について、自らの言葉で語ることはなかった。

これ以前、西洋の言語としてまず認識されてきたのは、いうまでもなくオランダ語であった。桜痴も安政二年から阿蘭陀大通詞名村八右衛門のもとで学んでいる。坂本多加雄は、このことについて「当時唯一の外国文明の窓口であった長崎に居住するに及んで、苟庵は、その本来の「実学」的志向から、源一郎が西洋の新知識を身につけることを望んだのであろう」（「福地桜痴と明治維新」前出）と述べている。しかし時代が下るにつれ、苟庵は、オランダ語よりも「実学」的な外国語があるのではないか、と考え始めたようである。

当地も和蘭学ハ追々すたり、英魯の学ト一変すべき時儀ニ御座候。先便にも申通り、唐訳士など和蘭訳士の膝を屈せず、日々英人、米人などに接し、英学を励ミ申候。追々出来立候よし。以前の長崎風も一変して、出精家多く相成申候。是に然るも其許の事のミあんじ申候。何卒油断なく精勤致され、天晴英魯の事にも通達して、時機に後れざる様、次々心掛らるべし。

（安政六年四月二十六日付書簡）

長崎でも、昨今、英語やロシア語を使用する学問の人気は高く、直接外国人と接して勉学に励む人々が多くなってきた、桜痴も時代に乗り遅れないように努力しなさい、と苟庵は言う。結局、桜痴は英語を選択したが、苟庵としては、「方今の時勢を見るに、英米ハ終に長久の事にもあらざるべし。世ハ程なく魯に帰すべし。今より其心得を以て、魯学など心がけたるべし」（安政六年十二月二十四日付書簡）と、英語よりもロシア語の方が、有用性が高いと認識していた。

先に触れたように、苟庵は、桜痴が東上する際、「水野、岩瀬、永井、川路および平山謙次郎、永持亨次郎、柴田貞太郎の諸氏（いづれも幕吏）僧家（ママ）にては林図書助（藕潢）、安積艮齋、古賀謹堂（蕃書調所頭取）、蘭学家にては伊東玄朴、杉田成卿、箕作阮甫の諸氏へ宛たる」（「懐往事談」第五回『国民之友』明治二十六年三月三日）紹介状を携行させている。長崎の町医であった苟庵が、なぜ、このような幕府の高官や著名な学者たちと知遇を得ていたのだろうか。この疑問に対して亀田一邦は、この紹介状が「嘉永六年のロシア使節[19]の応接に西下した人物を多く含み、その際に苟庵とまとまった交流が持たれた可能性が高いように思われる」（「福地苟庵小伝」前出）と指摘している。亀田は具体的な人名を挙げてはいないが、当時、長崎でロシア人一行の応接役に当たっていたのは、長崎奉行の水野筑後守忠徳や御勘定奉行の川路左衛門尉聖謨、御徒目付の永持亨次郎や御儒者の古賀謹堂らである。森山多吉郎もこの時、通詞として同席していた[20]。

また、苟庵の養父である福地嘉昌も、文化年間にロシア人来日の噂を聞き、松前に向かったことがある[21]。苟庵はこのような周囲の人々から、ロシア、またはロシア人に対する情報を仕入れ、その優位性を想定したのかもしれない。

ともかく、安政六年の頃は、オランダ語学習に次いで学ぶべき外国語は英語である、という福沢のような直線的な発想が、苟庵と桜痴には希薄だったのではないだろうか。福地信世は、「東洋は英語でなければ行けぬと云ふ事を苟庵が感じたので、源一郎も左様になつたのである」（「長崎と上海の往事（福地苟庵の書簡より）」前出）、と述べているが、紆余曲折がありながら、桜痴が英語学習を選択したのは、偏に森山多吉郎とのつながりによるものであろう。

森山は、長崎地役人のオランダ通詞でありながら、英語にも通じており、江戸においては中浜万次郎のほか、森山のみが、英書を読むことができる人物として知られていた。またプチャーチンの秘書官として同行していたゴンチャローフは、森山と英語で海外情報について語り合ったと記している[22]。上京後、苟庵から時勢についての情報を得ていながら、ロシア語ではなく英語を学習し始めたのは、森山家に寄宿していた桜痴にとっては、自然な選択だったのだろう。

2　通詞としての登用と事件

桜痴が幕府に登用されるきっかけとなったのも、森山であった。「仕途日記」には、安政六年の出来事として以下のように記されている。

五月廿七日　品川沖英吉利船渡来ニ付支配森山多吉郎申合通

弁御用

六月十一日　金川御開港御用ニ付出張

七月八日　御雇通詞被仰付

まず、桜痴は森山の部下として、通訳を務めるようになった。六月の横浜開港により、江戸と金川（神奈川）を行き来するようになり、七月八日、正式に幕府御雇通詞として、登用された[23]。その報告を受けた苟庵は、次のような返簡を送っている。

七月六日之書牘、八月十三日相届致披見候。（中略）七月五日、御用ニ而御雇中、御手当としては、拾人扶持被下置候由、誠ニ以難有仕合。此書信を承り、雀躍不啻、即十五日、家祖嘉昌翁之尊像へ酒餅を備へ、三宝ニ其許之書牘を置候而、親族を集め、祝盃を酌かハし、相よろこび申候。其許様、廿歳未満ニして、落魄之書生、御擢用を蒙り、殊ニ過分之俸米を賜る事、国家之鴻恩、後来粉骨細身しても奉報べき事肝要也。第一よろこぶべきハ、他姓を不冒、福地苟庵倅と云を以て、出身、新に一家を創業せらるべき事。其身之規模ニして、家の光祥、祖先の霊魂も定而満足なるべしと存候。

（安政六年八月十七日付書簡）

桜痴がこの書簡を受け取ったのは、安政六年九月二十一日、勤務先の「神奈川運上所」（現横浜市中区日本大通一）である。苟庵がその就任に狂喜した御雇通詞として、同所に詰めていた最中のことであろう。「仕途日記」には、七月八日に同役を仰せ付けられたとあるが、本書簡により、それより二日前、七月六日には御雇通詞の内定と、それに伴う俸禄が通達されていたことがわかる。

桜痴の就任報告を受けた苟庵は、その書簡を酒餅とともに家祖嘉昌の像へ備え、親族を集めて祝杯を挙げた。多少過剰とも見える苟庵の反応である。孫に当たる信世は、これら苟庵の書簡を総括して、「太府君、長崎にありて、常に心を府君之事に置かれ、其情紙面に細やかなり」と記している[24]。確かに、苟庵の書簡は桜痴に対する慈愛に満ちている。しかし、苟庵がこれほどまでに桜痴の仕官を喜んだのは、ただ純粋に息子の出世を誇らしく思った、というだけではない。「経綸の学を以て、幕府を干し、諸侯に求めたれども、皆容られ」（「石橋先生伝」前出）なかった苟庵自身の宿願が、息子によって達成されたためでもあった。

また苟庵は、なによりも「福地苟庵倅」として桜痴の仕官が叶ったことを誇りとした。これは他家に生まれた嘉昌や苟庵が、養子入りして、福地家を継いできたためであり[25]、桜痴も一度養嗣子として名村家で起居していたためである。苟庵には、嘉昌や自分と同じように桜痴もまた、他家を相続し、身を立てるのか、という思いがあったに違いない。しかし幸か不幸か桜痴は福地家に戻され[26]、「福地」源一郎として幕府に仕官することとなった。養子相続が続いた福地家において、これは快挙というよりほかにない慶事であった。

江戸に来て約半年、通弁として仕官の道が開けた桜痴であったが、攘夷派が跋扈していたこの時代、その身に危険が迫ることもあった。

万延元年十月、オランダ人ヒュースケンが、赤羽根の外国人応接所から、米国公使館に指定されていた善福寺に帰る途中、兇徒に殺害されるという事件が起こった[27]。桜痴は五、六日前までこの

応接所に詰めていたが、当日は勤務時期でなかったため、難を逃れた。しかし、その翌年、文久元年五月二十八日に起きた高輪東禅寺英国公使館の襲撃事件では、その場に居合わせることとなった。

夕刻から小雨が降っていたこの日、詰所に戻った桜痴は、小間使いに蒲団をひかせ、寝床に就いた。その途端、外が俄に騒然となり、狼藉者の侵入を告げる声が聞こえた。仲間と共に飛び起き、裸足で詰所を飛び出すと、小雨は止んでいたものの、月もなく、暗闇であった。狼狽しつつ役所を開けていると、兇徒を討ち取った別手組の某が生首を携えて来た。一番首の高名を、その担当者である桜痴に記録させるためであった。しかし、当時二十歳の桜痴は「生れて初めて人間の生首を見て実に驚愕して為すべき所を知らず」（「懐往事談」第七回『国民之友』明治二十六年四月十三日）、その護衛の者に早く首を受け取れと、一喝される有様であった。

この事件で、イギリス駐日公使館一等書記官として江戸に赴任したローレンス・オリファントは、暴徒の急襲を受けて、左腕に骨まで達する傷を負った。桜痴は本館とは少し離れた詰所に居たため、怪我をすることも、狼藉者と刃を交わせることもなかったが、この、かつてない経験は桜痴に、大きな動揺を与えた。事件から約半月後の苟庵の書簡には、この事件について次のように言及されている。

本書相認、未托駅便以前、忽消息到来、近状承之、安心此事ニ御座候。（中略）高輪東禅寺闘争、扨々おそろしき事。よくぞ災ニかゝられず。其許ハ文吏の事なれバ、とかく右等の場合ハ逃るニ如ハなし。此、以後とても、とかく禍を逃るゝ計策、第一可存候。（文久元年六月十五日付書簡）

苟庵が返書を定期便に託すより早く、第二便が桜痴から追送されてきた。父親の心配を憂慮してか、桜痴は事件の経過を二度にわたって苟庵に書き送っていたようである。東禅寺事件の詳細を知った苟庵は、息子の身を案じて、お前は腕に自信がある武官ではないのだから、今後このような場面に遭遇した時は、ともかく逃げろ、と助言している。

二度目の桜痴の書簡によって、息子の無事を確認した苟庵は、安心したのか、「京師祇園会一見、誠ニ美々敷事也。浪花ハさして異事なし。先ハ目出度、後喜之時を期す。匆々頓首」とのんびりとした様子で書簡を締めくくっている。当時、上方に来ていた苟庵[28]は、六月七日から十四日まで続いた京都の祇園祭を、穏やかな気持ちで見物したことだろう。

3　苟庵の忠告と桜痴の動向

書簡には、桜痴への助言が散見されるが、その中で最も多いのは、次のような忠告である。

東都ハ別而顕官の中ニ周旋する事なれバ、とかく多言を慎ミ、貞実第一たるべし。（中略）能々謙遜ニしても、人の娼嫉を免がれ候様可被致。豪傑の士ハ必ず娼嫉を免がれて、終ニ宿志を遂るなれバ、蠖屈の心得第一なるべし。

（安政六年四月二十六日付書簡）

知識をひけらかして、多弁を弄するのは愚かな行為であり、将

来の為には慎み深く過ごすことが大事であるという忠告を、苟庵は幾度となく書き送っている。[29] このような助言を受けていたにもかかわらず、桜痴は東上後、早速、昌平坂学問所で他の生徒の学力を貶して「異説を饒舌し」（「懐往事談」第五回　前出）、学問所の教授であった安積艮齋に疎まれた。艮齋は、苟庵が紹介状を持たせた人物のひとりである。しかも右書簡内には、「安積先生及箕作など、定而折々周旋なるべし。（中略）安積先生江入門等、何より相よろこび申候」と記されており、出世の糸口となるであろう艮齋への入門を喜んでいた。桜痴が艮齋の機嫌を損ねたことを知った苟庵は、さぞかし落胆したことであろう。この性格は、苟庵が黄泉の客となった後も、変わることがなかった。

「余が持説を世上に試るの機関」（「新聞紙実歴」第一『国民之友』明治二十七年一月十三日）として始めた『江湖新聞』（慶応四年閏四月三日から五月二十二日）では、薩長を批判して筆禍を蒙り、慶応四年五月十八日に投獄されている。[30] 友人の中には事前に忠告してくれた人物もいたが、「年少の客気に誇りて」、この忠告を無視した。苟庵の心配が現実のものとなった一例である。

苟庵の忠告は衣服にも及んでいる。

長崎人のくせとして少し意を得る事あれバ、衣服調度に美を競ハんとす。是小人の常情也。平生美服ハ甚見苦しく、その見識も見らるゝ者也。努めて長崎臭を免がるべし。

（安政六年十二月二十四日付書簡）

「京の女郎に長崎ゐしやうきせて、ちゝやちん〳〵、ちつくり江戸のはりをもたせて、大坂の揚屋で遊びたい」（竹田出雲・三好松洛・並木千柳『双蝶蝶曲輪日記』寛延二年初演　黒木文庫本）ということばが古くからあるが、[31] 苟庵も長崎の人々は着道楽だと考えていた。日常的に美服を用いることは見苦しいと、苟庵が戒めていたにもかかわらず、[32] 桜痴の「長崎人のくせ」は終生改まることがなかった。

日本服は何時も流行を外さず、凝りに凝つて三井呉服店に注文し、又染物は竺仙に限り、毎日襦袢から上着羽織迄、一切着替へる程の贅沢ゆゑ、一年中の衣類は箪笥三十棹、長持二棹に余り、遊興先へまで、日々の着替を送り届けしめたりと云ふ。洋服の古と、和服の新と、其差殆んど別人の如し

（「桜痴逸事」三『東京朝日新聞』明治三十九年一月十二日）

桜痴は洋服に関心が薄い反面、和服にはこだわり、数多くの着物を誂えていた。苟庵の意に反した桜痴の道楽は、多くの人々に印象深く刻まれており、柳橋の芸者が桜痴に対して発した悪口も、「福地の衣紋竹野郎が」（嘯月生「桜痴居士」『文芸倶楽部』明治三十二年二月）と、その着道楽を揶揄するものであった。

桜痴が染物を任せていた竺仙（橋本素行）は、喜寿となった明治三十三年、『恩』を刊行した。乾坤二冊の内、坤巻には各人からの書画詩歌などが載録されており、桜痴の祝辞と手紙も、ここに見ることができる。両者は単なる商売上の関係を越え、親交を結んでいたといえるだろう。また『恩』の乾巻には、細木香以や馬十連の人々についての詳細が記されている。馬十連とは、嘉永五年初冬頃成立した、遊興を主とした会である。その顔ぶれは、質渡世を営む斎藤是仏や歌舞伎狂言作者の二代目河竹新七（其水）、歌舞伎俳優の八代目市川団十郎、新吉原角町で質屋を営む今井安右衛門、新吉原の幇間の荻江露助（のち都千中）、田子七、

二代目桜川善孝、そして竺仙などであった。

榎本破笠は、「柏木嘉一郎」[33]なる人物を仲介として、桜痴が文久の末頃から、この馬十連に出入りするようになったと述べている[34]。そのいきさつは不明であるが、馬十連が吉原関係者を多く含んでいたことが、少なからず影響しているものと思われる。桜痴は、水野筑後守の屋敷に身を寄せていた頃から、吉原に足繁く通っており[35]、明治以降には花街の大通人と称され、大門にその揮毫が刻まれるほど、吉原との関係は深くなっていた[36]。

荷庵は、「驕謾、遊堕、多言、雑談、飽酔、是を学者の五戒とする也」（安政六年十二月二十四日付書簡）と訓戒しているが、江戸東上後の桜痴の放蕩は、多方面に及ぶ活動の主要な土台となっていった。

遊興を楽しむ馬十連の席で知り合ったとされているのが、九代目市川団十郎である。桜痴も九代目も正式な馬十連のメンバーではなかったが[37]、吉原で放蕩を尽くす桜痴と、肉親（八代目団十郎）が参加していた九代目団十郎とが、馬十連を中心にして顔を合わせたとしても、不思議はない。両者の出会いによって、後に演劇改良運動が推進され、歌舞伎の地位向上に貢献したことは、よく知られている。また、竺仙は『恩』序文に「僕之有今日。出于香以秀民是仏三大人誘掖之恩者多」と記しているように、豪商、細木香以とも親しく交際していた。奉公先でこの香以に可愛がられ、年を経てから彼の小伝を執筆したのが、仮名垣魯文である[38]。

桜痴は慶応四年頃に、浅草馬道に居を構えていたが、魯文はその真向かいに住んでおり、共に吉原へ繰り込んで行く仲であった。明治二年頃に、英語塾を開いた桜痴は、そこの「受附なり会計なりが魯文に山々亭有人」（嘯月生「桜痴居士」前出）を据えており、戯作者魯文が維新後、『仮名読新聞』を発行し、新聞業へ参入するのは、『江湖新聞』を手掛けた桜痴の経験から、影響を受けたものと思われる。また、魯文の友人である山々亭有人とも、桜痴は親しい仲であった。桜痴が筆禍を蒙った『江湖新聞』の発行には、有人が協力者として名を連ねており、また後年、『東京日日新聞』に桜痴を招聘した人物でもある[39]。有人は大新聞となった『東京日日新聞』の体質に合わなくなったため、別に『警察新報』[40]そして『やまと新聞』[41]を発行するが、有人が新聞人として立脚する根底には、やはり『江湖新聞』での経験が生かされたと見て良いだろう。

おわりに

桜痴は、「生来その家庭の教育は長崎地役人の風に同からざる」（「桜痴居士自筆小伝」一『東京朝日新聞』明治三十九年一月六日）家に育ったと、認識していた。父、荷庵は長門国の出であり、その養父、嘉昌も讃岐国の出身であるため、福地家では長崎という風土を、客観視できる家庭環境にあった。そのため桜痴自身も「長崎士人の気風に合は」ないと考えていた。しかしながら、荷庵の手紙から明白なように、その着道楽ぶりや、生真面目な「出精家」とは言い難い遊興の様子などを見ると、近世長崎で生まれ育った桜痴には、紛れもなく長崎人としての気風が備わっていたといえよう。

また荷庵が桜痴に蘭学などを学ばせたのも、海外に開かれた長

崎という土地柄の影響が大きい。長崎を地盤としていた荷庵の人脈が、上京後の桜痴に生かされていたことはいうまでもない。

しかし、政情の混乱と激変、そして荷庵が心配した桜痴自身の性分が、政治に関与することを主眼とした「有用の人」から逸脱させるひとつの要因ともなった。

今日、桜痴の生涯を評して、「天分の動くままに失脚」（柳田泉「福地桜痴」『福地桜痴集』筑摩書房　昭和四十一年）した人物であるとか、「ひたすら権力者に身をよせ、政治的な流れに従って一身を処する者」（飯田鼎「福地桜痴と福沢諭吉――『懐往事談』と『福翁自伝』をめぐって――」『三田学会雑誌』平成二年一月）であったなどという認識が多く見られる。桜痴は一見、無軌道で「無用」の人材となったように見える。しかし、旧幕時代からの高官との縁や遊興での人脈などを通し、多領域の人士と親交を深めていたことが、明治以降の新聞や歌舞伎に関わる慣習及び意識を変えさせていく根元となったのではないだろうか。新歌舞伎の旗手であった岡本綺堂は、「演劇改良会その他が劇の向上を促して、局外の文士で劇作に筆を染める人がおいおい現れてきた」（岡本綺堂「その頃の戯曲界」『ランプの下にて』岩波書店平成十三年）と述べており、面識のあった桜痴の活動が新しい局面を切り開いたと評価している。

福地桜痴の仕事を見据える際に、幕臣であったという矜恃だけでなく、幕末長崎の知的状況や、長崎人という気風を考慮すると、「失敗者となつて、没落した人」（守随憲治「福地桜痴論」『国語と国文学』昭和二十一年十月）などとは、また違った側面が見えてくるのではないだろうか。

注

（1）桜痴の逝去は明治三十九年一月四日。

（2）『東京朝日新聞』明治三十九年一月九日

（3）拙稿「岡本敬之助と九代目市川団十郎の交友」『日本近代文学』平成二十一年五月、「山々亭有人『行流英語都々逸』の周辺」『立教大学日本文学』平成二十二年十二月参照

（4）『東京日日新聞』明治十七年六月二十八日

（5）日本近代文学館には荷庵が友人達と詠んだ連歌や俳句が数点残されている。

（6）野崎左文が保管していたこの略伝は、「明治十八年中、余が今日新聞社に在りて、広く日本十二傑の投票を募りし時、氏は新聞記者として最高点を得られしかば、（中略）一日氏を自邸に訪れ、その閲歴を聞かんことを乞ひしに（中略）翌朝余の許へ送り越されしもの」（「桜痴居士自筆小伝」一『東京朝日新聞』明治三十九年一月六日）である。

（7）「桜痴居士自筆小伝」十『東京朝日新聞』明治三十九年一月二十日

（8）桜痴生前に逸話を記した嘯月生も「安政四年の冬筑後守に連れられて初めて長崎を立て江戸へ来た」（「桜痴居士」『文芸倶楽部』明治三十二年二月）と述べている。なお、桜痴の書生であった榎本破笠の「桜痴の逸話と断片」（『桜痴居士と市川団十郎』国光社　明治三十六年）にも、この逸話とほぼ同文が掲載されている。また鈴木行三「桜痴居士年譜」（『学苑』昭和三十三年五月）も安政四年説を唱えている。

(9) 桜痴の回顧録「懐往事談」では、「安政六年是より先、余は郷里なる長崎を出で、江戸に来り」(『国民之友』明治二十五年十二月二十三日)と、上京年時は曖昧にされている。

(10) 二木慶「福地桜痴」『学苑』昭和三十二年十一月、鈴木祥造「福地桜痴の歴史観について」『歴史研究』昭和四十四年十二月、『近代文学研究叢書』第八巻　昭和女子大学近代文学研究室編集発行　昭和四十七年ほか。

(11) 咸臨丸をオランダから回船し、長崎で操船指導に当たったファン・カッテンディーケの回想録に、「エド号および咸臨丸の二船は、艦長役の勝および矢田堀両氏指揮の下に、江戸へ向け出向の準備を行なった」(『長崎海軍伝習所の日々』東洋文庫　昭和三十九年)とあり、また正綱数道「幕府軍艦咸臨丸の要目について」(『日本造船学会誌』平成十五年七月)にも、安政五年江戸に回航されたことが記されている。

(12) 「景蔵、麟太郎、亨次郎儀、阿蘭陀より貢献之蒸気船、運用其外伝習御用相勤、一船之儀、重立取扱候様、伊勢守殿被仰渡候」(「手頭留　六」『長崎幕末史料大成』3　開国対策編Ⅰ　長崎文献社　昭和四十五年)

(13) 「桜痴居士自筆小伝」二『東京朝日新聞』明治三十九年一月七日

(14) 『温恭院殿御実記』安政四年四月十五日の項に、「御役替(中略)一　長崎奉行兼帯　御勘定奉行　水野筑後守(忠徳)」とあり、同日付で、水野筑後守と岩瀬伊賀守忠震へ「長崎表江為二御用一被レ遣候」との申し渡しがある。この日、水野筑後守の長崎奉行着任と、長崎行きが決定した。また同書、安政四年十二月三日の記事に「御役替」として、「田安殿家老松平河内守跡御勘定奉行長崎奉行　兼帯　水野筑後守(忠徳)」とあり、この日、長崎奉行からの転任が命じられている。(『続徳川実記』第三編　吉川弘文館　平成三年)

(15) 亀田一邦「福地苟庵小伝」『幕末防長儒医の研究』知泉書館　平成十八年

(16) 「廣川忠左衛門殿様、愚老よりも呉々御懇篤を難有かる趣、御通達可然可被申上候。何事も水野公江奉委候而、貞実第一ニ勤業可有之候。水野公ハ、苟にも不直の事、御嫌ひに存候」(安政六年四月二十六日付書簡)、「是全く水野公、柴田公、平山公、及び森山メース(論者注　meester　オランダ語で先生の意)厚き引立故なるべし。(中略)此節老父より水野公、柴田公、森山先生へ謝牘出し申候」(安政六年八月十七日付書簡)、「水筑公又々外国奉行ニ而、西洋行目出度御事ニハ候へども、洋行ハ定而御迷惑御事と存候」(文久元年六月十五日付書簡)

(17) 福沢諭吉『福翁自伝』(岩波書店　昭和五十八年)には「小石川水道町」と記してある。金剛寺坂上と小石川水道町は現在の後楽園駅周辺に位置しており、近隣に位置している。桜痴と福沢の差は、地名の認識の違いであろう。

(18) 『福翁自伝』前出

(19) 嘉永六年七月十八日、長崎に入港したプチャーチン一行を指す。

(20) 『大日本古文書』幕末外国関係文書3　東京帝国大学　明治四十四年

(21) 「文化年中、露人、北陸に寇すと聴き、家を携て松前に至り居ること三年」(福地桜痴「石橋先生伝」『東京日日新聞』明治十七年六月二十八日)

(22) 高野明・島田陽訳『ゴンチャローフ日本渡航記』雄松堂書店　昭和四十四年

(23) 「安政六年(時に十九)五月横浜開港各国公使江戸在留の時に際し幕府は通弁官を求めたり源一郎乃ち外国奉行支配の通弁御用雇となり十人扶持を被下て横浜江戸の間に往来したり」(「桜痴居士自筆小伝」二『東京朝日新聞』明治三十九年一月七日)。当時の通訳の問題については、木村直樹『〈通訳〉たちの幕末維新』(吉川弘文館　平成二十四年)に詳しい。

(24) 書簡を収納した木箱の蓋の文面である。

(25) 「嘉昌翁ハ、元讃州丸亀藩士矢野某の子なり。家を去て、医を学び、京師に来て、福地源輔の養子となり(中略)苟庵(中略)寛政七年正月九日を以て長門国府中に生る。其父を岸田丈右衛門と云ふ。長門藩士剣術師範家なり(中略)嘉昌翁子なく、唯一女子あるのみなれバ、先生を養子とし、娶す」(「石橋先生伝」二十八日　前出)

(26) 桜痴は養子入りした一年後に、「内外不折合のために是非なく離縁となりて、養家を放逐」(「桜痴居士自筆小伝」一『東京朝日新聞』明治三十九年一月六日)された。

(27) 日本との国交交渉のためにやってきた孛漏(プロイス)生国には、オランダ語に通じた人材が不足していた。そこで、米国公使館の通弁官であったヒュースケンが、同国のために通訳を行っていた。(「懐往事談」第六回『国民之友』明治二十六年三月二十三日)

(28) 近代文学館蔵の『(有馬温泉における連歌とその書き付け(苟庵文))』に、「文久元年　島田橘園ぬしと、もに、浪花に旅住居せしが、ふと有馬の湯治をおもひたち、五月の五日に浪花を出、翌六日有馬に着(中略)五月八日　石橋認」とある。同書は縦十二・〇×横三四・二cmの仮綴、五丁の自筆本である。

(29) 本文以外にも、次のような文面がしばしば見られる。「申迄もなけれど、諸事丁寧にして多言を慎むべし」(安政五年十二月二十四日付書簡)、「とかくいらぬ口をきく事、誠ニ慎むべき事也。諺の如く、口ハ禍門たる事、兼々心得べし」(安政六年四月二十六日付書簡)、「追々申遣候通り、人の所長を聞て、己が所長をバ漫説せぬが第一の心がけ也」(安政六年七月二十五日付書簡)、「謙譲を専として、人の嫉妬を免るゝ事、第一の心がけ也」(安政六年八月十七日付書簡)、「とかく譲論を旨として、篤実の風あらまほしく候」(文久元年十月十五日付書簡)など。

(30) 「新聞紙実録」『福地桜痴集』筑摩書房　昭和四十一年

(31) このほか、「京の女郎に江戸のはりをもたせ、長崎の衣裳をきせて、大坂の揚屋であそぶべしとハ、古ひ言伝へなり」(「君粧俚評」『澪標』天明三年刊　寛政十年再板　国会図書館本)などの例がある。

(32) 「衣服も私服ハ廉なるに如ハなし」(万延元年閏三月七日付書簡)

(33) 柏木探古(貨一郎)か。探古は求古会という九代目団十郎

の演劇改良研究機関に参加していた人物である。（拙稿「岡本敬之助と九代目市川団十郎の交友」『日本近代文学』平成二十一年五月参照）

(34) 『桜痴居士と市川団十郎』国光社　明治三十六年

(35) 近藤蕉雨「花柳史上の桜痴居士」『文芸倶楽部』明治三十九年二月

(36) 佐々木秀二郎『新聞記者列伝』共同社　明治十三年。また明治十四年、新たに建立された鉄柱の大門には、吉原の会所に依頼され、桜痴が揮毫した漢詩が刻まれていた。

(37) 拙稿「九代目市川団十郎と福地桜痴出会いの場、馬十連について」『国文研ニューズ』平成二十三年四月参照

(38) 仮名垣魯文「再来紀文廓花街」『歌舞伎新報』明治十三年十二月十七日～明治十四年四月二十三日

(39) 土谷桃子『江戸と明治を生きた戯作者　山々亭有人・条野採菊散人』近代文芸社　平成二十一年

(40) 明治十七年十月四日創刊

(41) 明治十九年十月七日創刊

〔付記〕資料の閲覧等に際して御高配を賜りました日本近代文学館に厚く御礼申し上げます。なお本研究は、科研費若手研究B「福地桜痴を中心とした幕末明治の文芸に関する総合的研究」（課題番号二四七二〇一一九）の成果の一部である。

（にわみさと　国文学研究資料館機関研究員）